

第24回日本看護管理学会学術集会開催

「看護管理の革新と発信」をテーマに 初のオンライン開催

第24回日本看護管理学会学術集会（学術集会長：福井大学教授・上野栄一氏）が、2020年8月28日、29日の2日間にわたり開催された。当初は金沢での開催が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑み、当日のLIVE配信および8月28日から9月3日までのオンデマンド配信でのオンライン開催に変更となった。

学術集会のテーマは、「看護管理の革新と発信」。例年とは異なる開催形態となったが、大きな変化が迫られる状況での看護管理の役割を考察する多彩なプログラムが企画された。参加者数（申込者数）は約3800名。本号ではその一部を紹介する。（本誌編集室）

学術集会長講演

学術集会長講演では、「看護管理の革新と発信をめざして」と題して、上野氏が取り組んでいるテキストマイニングによる「看護サービスの可視化」などの成果を踏まえ、看護における革新の意義とその方向性について、幅広い観点から考察された。

上野氏は①看護の革新（イノベーション）とは何か、②暗黙知をいかに形にするか、③看護の成果をいかに看護実践に使うか、④そしてこれらの成果をいかに発信するか、の4点を軸に講演。看護のイノベーションへの提言として「最も

有効で可能なケアを提供するには、観察力と研究力が必要である」とし、意識を改革し、経験から新しいものを創出するために「これまでの経験の検証」が必要と強調した。最後に「自分自身の体験を言語化する努力をする」「みんなで話し合うことが重要」というメッセージを参加者に投げかけた。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）関連企画

本学会での特徴的なプログラムとして、新型コロナウイルス感染症（COVID-19以下、新型コロナ）に関連したセッションが複数企画されたことが挙げられる。ここではそのうちの2つを紹介する

学会緊急シンポジウム「COVID-19に立ち向かう看護管理者へのメッセージ—新型コロナウイルス感染症の次なる波（感染拡大）に備える看護管理の論点整理」

多くの看護職が感染症対応に従事し、看護管理に携わるトップマネジャーの全力をあげた取り組みが日本の医療を支えてきた。緊急シンポジウムでは座長の鶴田恵子氏（聖隷クリストファー大学看護学部）と河嶋知子氏（独立行政法人地域医療機能推進機構本部企画経営部）の2名による進行で、国内発生早期から国の要請を受けて積極的な対応をした地域医療機能推進機構と日本赤十字社のトップマネジャーである河嶋氏と若林稲美氏（武蔵野赤十字病院）、野月千春氏（独立行政法人地域医療機能推進機構 東京新宿メディカルセンター）が新型コロナ対応の経験を紹介した。

野月氏は、自院で経験した院内クラスターへの対応を紹介した。特に無症状の患者による感染リスクを実感したとし、PCR検査に過度に依存しないこと、誰しもが感染源になりうるものとして感染対策を徹底することを教訓として挙げた。

ディスカッションでは、「感染管理はICTが中心となるが、病院組織のコントロールは看護管理者の担う役割が大きい」「看護師長をととして正確な情報を全スタッフと共有することが重要」など、活発な意見交換がされた。経営面や来年度に向けた採用などの課題にも触れ、さまざまな視点から第1波での経験をもとに議論され、今後の第2波、第3波に備えた準備の必要性が共有された。

特別学会緊急企画「新型コロナウイルス感染対応の取り組み事例」

本学術集会では、新型コロナウイルスの世界的な流行を踏まえ、各施設での新型コロナウイルスの対応と対策をどのようにされているか、取り組み事例を募集し、9名の看護管理者が自施設での実践を紹介した。座長は別府千恵氏（北里大学病院看護部）と洪愛子氏（神戸女子大学看護学部）。

公立大学法人横浜市立大学附属病院の島田朋子氏は、ダイヤモンドプリンセス号の患者と市中感染患者を受け入れた経験を、BCP（事業継続計画）の4S（staff, stuff/supplies, structure/space, system）の視点から振り返った。県や市と連携を取り合い、重症管理や通常診療を継続するためにフェーズに沿って看護体制を変更させていった経験が語られた。特に、初期は医療体制や船舶患者に関する情報不足・混乱があり、WEB掲示板やメール、毎朝の看護師長への情報提供など、情報共有の重要性が強調された。

ICTなどスペシャリストの活用、訪問看護ステーションの事業継続上の不安と困難、医療材料管理など物品管理の可視化の重要性、プラチナナースの活用などさまざまな視点からそれぞれの組織での新型コロナ感染拡大第1波に対する対応が報告された。各施設・地域での感染状況や医療資源をふまえて直面した課題



学術集会長の
上野栄一氏



学術集会ポスター



学術集会長講演のスライドより

に対して試行錯誤した取り組み事例が、今後、全国の施設で活かされていくことが期待される。

学会特別講演「看護管理の未来に向けた提言」

学術集会ではこのほか、日本看護管理学会の名誉会員である川嶋みどり氏（日本赤十字看護大学名誉教授）による学会特別講演「看護管理で拓く未来—ナイチンゲール生誕200年の今、COVID-19由来の困難をバネに—」も企画された。

川嶋氏は、奇しくもナイチンゲール生誕200年の年にCOVID-19の感染拡大が起こったことに因縁を感じるとした上で、COVID-19の影響を受ける前から、「行き過ぎた医療安全」や「診療報酬ファースト」とも言える傾向に違和感があり、「看護本来の姿」からかけ離れた状況に危機感を覚えていたと振り返った。

そして、「安楽の文化を病院文化の柱に」してほしいと述べるとともに、「自分の言葉で看護を語る看護管理者になってほしい」「経営の論理から人間性の論理へギアチェンジしてほしい」と看護管理者へのメッセージを送った。

シンポジウム1「看護管理のエビデンスを見える化し革新につなげる—日頃蓄積している重症度、医療・看護必要度の俯瞰から始めよう」

シンポジウム1では、緒方泰子氏（東京医科歯科大学大学院）座長のもと、病院データに詳しい秋山智弥氏（岩手医科大学）、森脇睦子氏（東京医科歯科大学）、林田賢史氏（産業医科大学）の3氏が、1人ひとりの患者・家族に寄り添う目に見えない看護ケアという営みの価値を、「重症度、医療・看護必要度」（以下、看護必要度）データを用いてどのように可視化できるのかについて、それぞれの研究やマネジメント経験を基に口演を行った。

看護必要度は、診療報酬上の入院基本料などの評価基準に採用されたことにより経営課題として着目され、そもそもの臨床マネジメントのためのデータ収集、看護の可視化という目的が薄れている実

情がある。

大学病院の看護管理者として看護必要度データをマネジメントや看護の質改善に活用してきた秋山氏はこうした実情に警鐘を鳴らした。その上で、「データは嘘をつかない」と述べ、各組織、1人ひとりの看護師が「自律した看護実践」の原則に立ち返って看護実践のアウトカムを積み重ね、そのアウトカムが看護必要度データを通して可視化されるべきであるとした。

なお、本シンポジウムの内容をより深く理解いただくため、3氏が登場した本誌2020年7月号特集もぜひご参照いただきたい。

次の第25回学術集会は、叶谷由佳氏（横浜市立大学）を学術集会長に、2021年8月28日、29日に、横浜市のパシフィコ横浜ノースを会場に開催される予定。テーマは「持続可能な社会をリードする創造的看護管理」。